

Title	アメリカ合衆国の学士課程教育におけるギリシャ・ローマ古典の読解： ウィスコンシン大学ILSプログラムの創設から
Sub Title	Reading of classics in American undergraduate curriculum: the foundation and early years of integrated liberal studies at the University of Wisconsin
Author	久原, みな子(Kuhara, Minako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.71 (2011.) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	From the late-nineteenth century to the 1960s, the reading of Greek and Roman classics in some form more or less constituted a "common core" of the general education program in American undergraduate curricula. The foundation of the Integrated Liberal Studies (ILS) at the University of Wisconsin in 1948 was one of such efforts to preserve the "common core," as well as a more integrated, meaningful sequence of learning that other American colleges also struggled for under the democratic and egalitarian pressure from increasingly diverse student bodies at that time. How did the seemingly elitist tradition of classical learning change or adapt to student demands for more practical and professional training? How did university educators utilize the reading of classics in their curriculum? What kind of classics did they think should be read and learned, and how? What was the purpose of the reading of classics for educators and students? This paper will attempt to answer these questions, first, by focusing on what the students in the ILS read and how they were expected to read in their curriculum, and second, by tracing the composition and the traits of the student body in the ILS. After experiencing the general education movement during the inter-war period and particularly in Wisconsin, the failure of "the Experimental College," the ILS Program again tried to create a milieu without an elitist connotation in which students could immerse themselves in the reading of Western canons including ancient Greek and Roman authors as a "common core" for realization of ideals of general education.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000071-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカ合衆国の学士課程教育におけるギリシャ・ローマ古典の読解

—ウィスコンシン大学 ILS プログラムの創設から—

Reading of Classics in American Undergraduate Curriculum: The Foundation and Early Years of Integrated Liberal Studies at the University of Wisconsin

久原 みな子*

Minako Kuhara

From the late-nineteenth century to the 1960s, the reading of Greek and Roman classics in some form more or less constituted a “common core” of the general education program in American undergraduate curricula. The foundation of the Integrated Liberal Studies (ILS) at the University of Wisconsin in 1948 was one of such efforts to preserve the “common core,” as well as a more integrated, meaningful sequence of learning that other American colleges also struggled for under the democratic and egalitarian pressure from increasingly diverse student bodies at that time. How did the seemingly elitist tradition of classical learning change or adapt to student demands for more practical and professional training? How did university educators utilize the reading of classics in their curriculum? What kind of classics did they think should be read and learned, and how? What was the purpose of the reading of classics for educators and students? This paper will attempt to answer these questions, first, by focusing on what the students in the ILS read and how they were expected to read in their curriculum, and second, by tracing the composition and the traits of the student body in the ILS. After experiencing the general education movement during the inter-war period and particularly in Wisconsin, the failure of “the Experimental College,” the ILS Program again tried to create a milieu *without* an elitist connotation in which students could immerse themselves in the reading of Western canons including ancient Greek and Roman authors as a “common core” for realization of ideals of general education.

はじめに

1948年ウィスコンシン大学の履修案内に、新しい科目が加わった。「ギリシャ・ローマ文化」という名の科目である。これは、同年から始まった統合リベラル・スタディーズ (Integrated Liberal Studies, 以下 ILS と略する) という学士課程の初めの2年を担う選択制のジェネラル・エデュケーションの

* University of Wisconsin-Madison, Department of Educational Policy Studies 博士課程

プログラムの中の科目のひとつである。履修案内には、さらに以下のような説明書きが続く。「4単位。ギリシャ文化の最盛期とローマ文化の最盛期の比較。翻訳での読解と古代美術についてのいくつかの講義。アガード氏、マッケンドリック氏¹⁾」。この短い説明書きがどれほどの関心を学生たちの中に喚起したか、あるいはしなかったかということは大きな問題ではないだろう。なぜならこのクラスは、ILSプログラムを選択した場合にほぼ全てが自動的に必修となり履修順序が指定される約48単位のうち、一番初めに履修すべき4単位であったからである。したがって、全てのILSの学生は好むと好まざるとに関わらずこのクラスを履修したはずである。またILS自体も、履修案内の中では歴史学科(History)と国際関係学科(International Relations)の説明との間にアルファベット順に機械的に挿入されているだけであり、ILSに所属しない学生にとってはほぼ注目する必要のないページであったに違いない。その無味乾燥な説明書きからも、このクラスではラテン語やギリシャ語の原典を読むことなく、1学期で二つの古代文化を学ぶということ以外、特筆すべき特徴も見当たらない。しかしながら、本稿では、一見したところ特別な意味は見出しがたいこのクラスに注目したい。

アメリカ合衆国の創設時から南北戦争後までギリシャ・ラテンの古典は、その「倫理的、政治的、弁論的、美的、教育的理想」を形成するのに重要な役割を果たしてきた²⁾。もちろん、様々な古代の著作の中でも人気のある作品や著者が何であったか、またアメリカ人がどのように古典を読み、利用してきたかということはアメリカ合衆国の歴史とともに変化してきた。しかし、古典を読むこと自体はアメリカの思想的伝統の中で無視できない位置を占めてきたと言える。特にウィンテラーが指摘するように、19世紀後半以降、単なるギリシャ語・ラテン語の習得よりも、古典を読み古代の文明を学ぶことがカレッジにおけるリベラル・エデュケーションの中心、「共通の核」として位置づけられるようになった。そして、カレッジ進学がもはやエリートだけのものではなくなってからも、ギリシャ・ローマの古典を何らかの形で読み、古代文明を西洋の知的伝統の一環として学ぶという経験は1960年代まで学部生にとって多かれ少なかれ共通の経験として残っていたのである³⁾。

合衆国の高等教育におけるこうしたギリシャ・ローマ古典を読み解釈するという行為は、エリザベス・ロングが「集団的行為(collective action)」と呼ぶ活動、すなわち、ある特定の状況下において特定のグループの中で形成され、伝播され、共有された行為であったと言える。ロングによれば、読むという行為は、特定の社会的関係の中で教えられなければならない、したがって、それは根本的に社会的な行為である⁴⁾。彼女のこうした主張は、もともと、広く受け入れられがちだった「私的領域での孤独な活動としての読書」といったイメージへの異議申し立てに端を発するものである。しかしながら、この社会的な行為としての読書という概念は、私たちの多くにとってなじみある経験である、学校をはじめとする教育的・制度的な環境における読書もまた根本的に社会的な、集団的な行為であったことを想起させる。ロングが指摘するように、こうした読書行為は、どのような種類の本が出版され、紹介され、読まれ、図書館の棚に収められ、そしてそれがどのように読まれるべきか、ということに関する権威のもとに形成される。こうした活動の中で、読書は、新しい社会的関係を作り出すとともにそれを再生産し、結果としてしばしば特定のグループの人々を疎外することとなる⁵⁾。大学のカリキュラムにおける古典語の学習および古典の読解も、まさにこのようなケースであったといえよう。なぜなら、学生たちは古典を読むための特定のリテラシーを身につけることによって、一定以上の教育を受けた人々が形成する世界への出入りを許されると同時に、それはそうした世界へのアクセスを一部の人々に限定する防壁としても機能するからである。

しかしながら、ILSが創設された1948年には、19世紀末以降高まり続ける高等教育に対する平等主義的かつ民主的な圧力が、これまでの比ではないほどに強力になり無視できない状態になっていた⁶⁾。この時代、学生たちからのより多様なカリキュラムへの要求を受けて、その形成過程から言ってエリート主義的であることを免れない古典を学ぶという伝統は、リベラル・エデュケーションを再定義する中で、すなわちジェネラル・エデュケーションを模索するなかで変化を余儀なくされた。学士課程教育における「共通の核」はギリシャ・ラテンの古典でなければいけないのか。そうであれば、ジェネラル・エデュケーションの枠の中でそうした古典はどのように読まれ学ばれるべきなのか。そして誰がそうした教育を受けるべきなのか。ILSプログラムもまた、20世紀前半を通して展開してきたさまざまなジェネラル・エデュケーションのプログラムと同様、こうした学士課程教育における「共通の核」をめぐる問題に取り組む中で生まれたのである。

本稿ではこうした「共通の核」をめぐるより大きな問いを念頭におきながら、ILSの創設とその初期の実践についてウィスコンシン大学のアーカイヴに残された一次資料からその一端を明らかにする。まず、20世紀半ばのアメリカ合衆国におけるジェネラル・エデュケーションの潮流と、その中でのILS創設の目的がどのようなものであったのかを概観したのち、上記の問題を明らかにする上で重要となる二つの点に注目する。一つ目は、ILSに在籍した学生たちが「ギリシャ・ローマ文化」のクラスの中で、何をどのように読むことが期待されていたかという点である。二つ目は、こうした古典を読んだILSの学生たちが誰であったかということである。これらのことから、古典を読むという行為が、ILSの一環として行われる中でどのように形成され、また意味づけられたのかということ明らかにしたい。結論を先取りすれば、ILSの創設は、20世紀に他のカレッジおよび大学も同様に経験していた、より多様で平等主義的で民主的な学生たちからの圧力のもとで、どのように学士課程カリキュラムにおける「共通の核」、特にここではギリシャ・ローマの古典を含む西洋の知的文化的伝統という「共通の核」を失わずに守るか、という様々な努力の一つであったといえる。ILSプログラムは、ジェネラル・エデュケーションの理念に沿った「共通の核」を備え、またそこでの古典の読まれ方もその理念にのっとったものであった。それは、後述するように戦間期のジェネラル・エデュケーション運動、特にウィスコンシン大学においては「実験カレッジ」の失敗をふまえて、エリート主義的な集団ではなく、より多くの学生たちが、そうしたギリシャ・ローマの古典を含む西洋の知的伝統に浸る機会を再び得られるようにするという試みであったのである。

1. 20世紀前半のアメリカ合衆国における学士課程教育とILSプログラムの創設

(1) 20世紀アメリカにおけるジェネラル・エデュケーション運動

1948年のILSプログラム創設は、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国におけるジェネラル・エデュケーションの再興という、より広い高等教育界の文脈において理解されるべきである。1981年、ボイヤールとレヴィーンは、20世紀アメリカ合衆国においては3度ジェネラル・エデュケーションの波があったと述べている。第一の波は、第一次世界大戦から大恐慌、そして1930年代まで続くものである。第二の波——ILSはまさにこの波の中で創設されたのだが——は、第二次世界大戦から1957年のソビエトによるスプートニク打ち上げ成功までである。そして第三の波は、ボイヤールらがこうした分析をするきっかけとなった1970年代からのものである。ボイヤールらは、これらのジェネラル・エデュケーション興隆のパターンを次のように分析している。すなわち、ジェネラル・エデュケーションを求める呼び声は、

戦争などの社会的・思想的混乱の中から上がり、そしてより職業的・専門的な教育の要請によって終わるのである⁷⁾。

ジェネラル・エデュケーションの第一波は、主として19世紀以降のカレッジ進学者の増加と大学で教えられる知識の拡大に対する応答であった。この時期、伝統的なカレッジは生き残りをかけて選択制を導入し、古典語などの必修をさらに減らすことによってより実用的・職業訓練の要素の強いクラスを追加した。一方、科学的研究の発展に力を入れる新しい研究大学もまた、専門的知識の有用性を積極的に認め、その内容・方法で学問領域と運営組織を分ける学科制を導入した。このような状況の中で問われた問題は、「拡大か整理か、有用性が教養か、民主主義かエリート主義か」という高等教育をめぐる二つの価値観の対立であった⁸⁾。こうした状況下において学生たちの学びが一貫性のない分裂したものになることを恐れた大学人たちは、専門分化と両立できるような、しかしより統一されたカリキュラムを模索した。彼らのこうした努力は、この時期、シカゴ大学のグレイト・ブックス・プログラム、ミネソタ大学のジェネラル・カレッジの創設、アマースト・カレッジでの新しいジェネラル・エデュケーション・プログラムなど様々な形となって実現した⁹⁾。このような改革の中で、ギリシャ・ローマの古典は、「共通の核」として西洋の知的遺産を学ぶというリベラル・エデュケーション、そしてジェネラル・エデュケーションのひとつの根強いパターンとして定着し、現代にまで繰り返し現れるようになるのである¹⁰⁾。

ジェネラル・エデュケーションはまた世界大戦の副産物でもあった。第一の波の中でジェネラル・エデュケーションを形作るのに影響を与えた一つのモデルは、コロンビア大学で開講された「戦争の係争関係」というクラスであった。このクラスはもともと第一次世界大戦中に軍人訓練の一環として、大戦に否応なく直面することとなった学生たちにその歴史的背景や国際関係・紛争に関する知識を与えるという目的で始められたものであった。1919年には、このクラスは新たに「現代文明」という名の新しいジェネラル・エデュケーションのクラスとなり、全ての1年生の必修となったのである。戦後の混乱と幻滅の中で、「精神的に疲れた」アメリカ人たちにとってジェネラル・エデュケーションはその経験を振り返り思索する格好の機会となり得た。しかしながら、この第一波も、大恐慌を迎え人々がジェネラル・エデュケーションよりも、より職業に直結する教育を求めるようになったことで終息する¹¹⁾。

第一のジェネラル・エデュケーションの興隆期のさなかである1927年、ウィスコンシン大学では、アマースト・カレッジからやってきた哲学教授アレクサンダー・ミークルジョン (Alexander Meiklejohn, 1872-1964) が新しい学士課程教育へのアプローチを始めていた。実験カレッジと名付けられたこの試みは、通常の学部生とは別に選抜された学生が、ひとつの男子寮に教師とともにが居住しながら、1年目にはペリクレスの時代の古代アテネ文明を、2年目には現代のアメリカ社会について学ぶという「アテネ・アメリカ・カリキュラム」に基づく2年制のプログラムであった。ここでの2年間の学習の後、学生たちは通常通りウィスコンシン大学で残りの学士課程を続けるか、他大学に編入することとなっていた。このカリキュラムのねらいは、古代ギリシャ文明を準拠枠とすることで、人間のさまざまな活動が相互に関係し合っていること、また知性がどのように問題解決に貢献できるのかということ学ぶことであった。ミークルジョンの考えでは、この二つの社会を軸とするカリキュラムから学ばれるはずである洞察を、各学生が複雑なアメリカ社会を生きていくために活用していくことが重要であった¹²⁾。

しかしながら、実験カレッジもまた1932年には閉鎖となる。というのも、そもそも「実験」である

という性質のみならず、運営上の問題や、実験カレッジ所属の学生の出自がユダヤ系とニューイングランド出身者に偏っていたこと、またそうした学生が政治的にも過激になりがちで、大学内の他の部署との対立を深めることとなったことがその原因であった。さらに大恐慌による経営難は大学の所在する州都マディソンにおいても避けがたいものであった。しかし、この短い歴史にもかかわらず、実験カレッジはアメリカ中の教育者からグレート・ブックス・プログラムなどと同様の注目を集めた¹³⁾。さらにいえば、この実験カレッジの失敗こそ、ウィスコンシン大学でのジェネラル・エデュケーション第二波の取り組み、すなわちILSプログラムの創設へとつながる土台を築いたといえるだろう¹⁴⁾。

ボイヤーらは、ジェネラル・エデュケーションを、普段使わないものも置いてあるが、その時々のも目的によってどのような用途にも対応できる「予備の部屋」に例えている¹⁵⁾。第二次世界大戦後、「予備の部屋」であるジェネラル・エデュケーションは、思索の機会として、またその時代のおよそ考えられる限り全ての教育的・思想的問題に対する万能薬として再び注目されることになる。国全体が再び内向き志向になる一方で、大学人たちは、卓越した学術研究を誇ってきたドイツで起こった非人道的な惨劇を目にし、社会における学問や大学の在り方を問い直さざるを得なくなった。さらなる争いを予感させるソビエトの台頭と、知識と科学技術の発展が戦争の被害を拡大させたという事実は、彼らを教えることとの目的とは何か、知識は何のためにあるのかという問題に立ち返らせ、少数のエリートではなく、民主主義社会にふさわしい責任感のある、道徳的で民主的な市民を育てるという使命が強調されるようになった。ジェネラル・エデュケーションは、こうした問題を取り上げ、またそうした使命を担いよう格好の機会となったのである。こうした傾向を象徴するのは、1945年にハーヴァード大学によって出版され、広く読まれた『自由社会におけるジェネラル・エデュケーション』によるジェネラル・エデュケーションのカリキュラムの提案であろう¹⁶⁾。

第二波の衰退は、1957年のソビエトによるスプートニク打ち上げをきっかけとしていた。アメリカ人にとってこの出来事は、彼らの教育システム、特に科学と科学技術分野での教育の失敗を印象付け、これらの分野へ力を注ぐことが求められるようになった。ジェネラル・エデュケーションがそもそも発展・細分化を続ける科学的・専門的知識の有用性と、伝統的・人文主義的な教養とを両極にその間で展開してきたことを思えば、この揺り戻しは必至であった。こうしてジェネラル・エデュケーションは1970年代の次なる社会的混乱の時期まで下火となるのである¹⁷⁾。

(2) ウィスコンシン大学におけるILSプログラム創設の背景

ILSプログラムの創設は戦後のウィスコンシン大学のより大きなカリキュラム改革に端を発している。1946年1月、教授たちの代表からなるカリキュラム委員会は、学士課程の教育を担うカレッジ(College of Letters and Science)での二つの新しいカリキュラム案——カリキュラムAとカリキュラムB——を提案した。「教養的/非職業的および職業的な学位(liberal and vocational)を目指す学生のニーズに答えるため」学科内の特定のコースやプログラムから形成されるカリキュラムAは同年から採用実施されることとなった。しかし、同時に「マイノリティ・レポート」¹⁸⁾であったカリキュラムBを支持した教授陣は、カリキュラムAよりも、より一貫性のある学習経験を提供できるであろうカリキュラムBの実現をも模索した。彼らは引き続きカリキュラム委員会Bを組織し、「綿密に一貫性の保たれたもう一つの学士課程カリキュラム」を1948年の秋に開設することを決めたのである。カリキュラム委員会Bは1947年4月には報告書をまとめ、改めて「B.A.およびB.S.につながるカリキュラムAに

におけるジェネラル・エデュケーションの要件についてのもう一つの選択肢」として統合リベラル・スタディーズ (Integrated Liberal Studies, ILS) を提案したのである¹⁹⁾。

カリキュラム委員会Bによる報告書は、アメリカの高等教育の発展や変化を考察しつつ、「指導原理がなく無計画な選択制に対する不満が増大していること」への懸念、「選択の自由を犠牲にすることなく、学士課程の勉学において計画と意味ある連鎖を与えること」の必要性を主張している。より具体的には、現行のカリキュラムが抱える6つの困難を指摘していた。すなわち、1) 学生たちに共通する知的経験が欠如していること、2) 目的あるジェネラル・エデュケーションのパターンがないこと、3) 学生たちが専門的・職業的授業を過度に重視していること、4) 教育において、また人文学・社会科学・自然科学の相互関係において統一性の感覚を作り出すことに失敗していること、5) ジェネラル・エデュケーションが専門的・職業的な授業の上級科目のための単なる準備となりがちであること、6) 現代の生活と過去とのつながりが欠如していることである²⁰⁾。

ジェネラル・エデュケーションに関する学術研究と他大学の事例を広範囲にわたって検討したのち、委員会は、内容的には「西洋文明への導入とすることができる」プログラムを採用した。ILSのプログラムは学科の区切りに従って組み立てられるものではなく、彼らが生きる同時代の世界に関する理解を深めるために必要な、学科を超えて相互に関係しあったバックグラウンドを与えることが目的であった。したがって、ILSのもとで開講されるクラスは全て時系列的に「ギリシャ・ローマ文明」から「近代工業社会」へと履修順序が決まっており、また「物質的世界」や「国際情勢」など学問横断的に設計された。また、授業で扱う題材を、学生を取りまく同時代的問題と関連付けるよう意図された²¹⁾。

カリキュラムの内容に加えて、ILSではジェネラル・エデュケーションと職業的あるいは専門的教育との関係、またその点に関して学生に適切な指導を与えることに特別な注意が払われた。ILSは、学生の将来の職業に直結するような専門的事項よりも、価値の問題を重視する生き方に備えるジェネラル・エデュケーションに重きを置いていた。ジェネラル・エデュケーションは、ついには学生の生涯にわたる学びのプロセスを形作る、終わりなき知的活動への導入として、学生の目を開かせるような意味あるものでなければならないとされたのである²²⁾。

また、ILSは民主的で開かれたものであるように計画された。ILSにおける教育活動の一貫性を保ちながら、しかし同時に、実験カレッジでの失敗をふまえて、ILSの学生とILSプログラムを履修しない一般の学生たちとを完全に分離することは避けなければならなかった。そのためILSはカレッジの中のひとつの学科(department)として設立された。定員は上限300人と定められたが、登録は学生の選択にまかされており、特別な入試や選考も設けず学部1年生ならば誰でも応募資格があった²³⁾。

2. ILSプログラムにおける古典：何を、そしてどのように学生たちは読んだのか

さて、これまでの部分でILSを取りまくアメリカの高等教育の状況とILSの創設経緯を概観してきた。以下では、ILSプログラムにける古典の読書がいかなるものであったのか、主にウィスコンシン大学のアーカイヴに所蔵されている「ギリシャ・ローマ文化」の授業シラバス案から見ていきたい。12ページからなるこのシラバス案は、ILSプログラムの準備段階の1948年3月にウィスコンシン大学で教鞭をとっており、またこのクラスを実際に教えることとなる2人の古典学者、アガードとマッケンドリックによって書かれたものである。もちろんこのシラバス案は、実際に学生に配布されたものと異なる可能性も否定できない。しかし、このクラスでどのような読書が期待されていたかを知るためには重

要なものであろう。シラバス案には、週ごとの授業計画、各ディスカッションでのトピック、読むべき文献のリストと、参考文献の一覧が含まれている。これらから分かることは、古典を読み学ぶことを通して、学生たちがILSプログラムの目的を達することができるようこのクラスが準備されているということである。

まず、シラバス案の最初のページでは、この「ギリシャ・ローマ文明」のクラスの目的が説明されている。

私たちは今学期中、私たちの人文主義的遺産の一部であるギリシャ人およびローマ人の芸術と偉大な著作のいくつかを学ぶことになる。これらは、現代の私たちの文明に今でも教えと警告を与えることができる過去の偉大な2つの文明の代表であると考え。こうした芸術や著作の意味を理解するために、私たちは、それらの形成を促した経済的、政治的、社会的制度についてある程度学ばなければならないだろう。私たちはそうした芸術や著作を、大きく異なる目的と業績を持った二つの文化の代表として分析しなければならない。そうすることによって、私たちは、文明を偉大なものにするいくつかの要素、またそれを衰退と崩壊へと導くいくつかの要素を発見できるかもしれないのである。しかし、個人個人が知的・感情的安定と幸福を追求するにあたり、私たちはそうした「何世紀にもわたり私たちに感銘を与えいまだ語りかけてくる」人文主義的業績の意義をも重視する。私たちはこの偉大な人類のコミュニティー時空を超えたひとつの世界—に所属する男女の同志たちに加わることになるのである²⁴⁾。

ここで強調されているのは、西洋の文明との継続性、人間の活動の諸側面が互いに関係しあっているということ、またそういったことを学ぶことが各学生の人生に関わっているということである。そしてそれは、まさにILSがプログラム全体を通して学生たちに学んでほしいと期待した事項にほかならない。

このシラバス案では、「ギリシャ・ローマ文化」はギリシャを扱う部分とローマを扱う部分の二つに分かれているが、学期を通して一冊の教科書が指定された。1947年に三人の古典学者たちによって編集された、*Greek and Roman Classics in Translation*である。2つの文明についての入門的なエッセイとギリシャ・ローマの古典からなるアンソロジーであるこの本は、もともとブルックリン・カレッジにおける、1学期で二つの古代文明を英語で学ぶクラスのための教科書として書かれ出版されたものであった。ホメロス、ヘロドトス、ツキディデス、プラトン、アリストテレス、テレンティウス、ルクレティウス、キケロ、ウェルギリウス、ホラティウスといった著作家を取り上げながら、さらにその他の詩人、弁論家、劇作家などを加え、1000ページ以上にわたって2つの古代文明の文学が幅広く扱われている。編者である古典学者たちは、まさにILSに関わる教授たちと同様の考えを抱いていた。すなわち、学生たちは古代文明の豊かな遺産を学士課程の一部として読み、学ぶべきであるが、古典語を読むための訓練をする時間がないために英訳でそれを行うべきであると考えていたのである²⁵⁾。

「ギリシャ・ローマ文化」のクラスでは、学生たちは毎週この教科書から通常ひとつか二つの作品を読むことになっていた。またしばしば補足として、例えばアガードが執筆した*What Democracy Meant to the Greeks*からの抜粋や教科書にない作品などのハンドアウトも適宜加えられた。こうした英訳での作品や関連する研究を読んできた上で、学生たちは毎週ディスカッションの時間を持つことになっていた。そこでのトピックは、各週のテーマについて確認するようなものだけでなく、学生たちが彼らの生

活や大学での学びそのものを振り返り関連付けることのできるようなものが積極的に取り上げられた。事実、後者の種類の質問は、学生たちの中に一貫性のある統合された世界観を育て、またそこから彼らがなんらかの洞察を得られるよう、学びを適切に導くという ILS の精神を反映したものであるといえる。すなわち、ある文明をひとつの有機体ととらえることにより、学科によって分断されがちな知識を統合することを試みる。そして、西洋文明の歴史的つながりを意識しながら、そうした統合的な枠組みを同時代の問題を考える際にも応用できるようにする。その際、このように古代文明を学ぶことの意義がどこにあるのか、さらには大学で学ぶことやその個人的また社会的有用性は何であるかということをも考えさせるのである。こうしたねらいをふまえて、例えば、次のような問いがシラバス案には掲載されている。「人文学とは何か」「なぜギリシャ・ローマ文明なのか」「現代の建築はパルテノンを模倣すべきか」「彼（ツキディデス）によるペロポネソス戦争の原因についての分析は、起こりうるかもしれない第三次大戦の原因を考えるのに応用することができるか」「どのような点で、ストア派の「ひとつの世界」という概念にあなたは賛同できるか」「キケロの教育プログラムはどのように現代のジェネラル・エデュケーションや専門的な要請と合致するか。「リベラルな」教育と「専門的な」教育の間には区別があるべきか」「ニューヨークのペンシルヴァニア駅がカラカラ浴場の模倣であることはうれしいか、あるいはがっかりか（そしてそれはなぜか）」。こうした問いは、学生たちの学びや人生が真空にあるのではなく、歴史的連続性と社会の様々な諸要素との関連の中にあることを彼らに気づかせ、その中で社会的責任感と目的意識を育てるために、シラバス案の段階でさえも、かなり意図的に教授たちによって作られていたのである。特にこのクラスは ILS 所属の全学生にとって1年目の初めの学期に履修しなければならないものであったために、学生とプログラムの雰囲気を決定する重要なものであったと考えられる²⁶⁾。

このクラスのユニークである点は、歴史学科や古典学科のクラスと比較するとより明らかになるだろう。例えば、ILS 開設時、古典学科にはラテン語とギリシャ語の二つの専攻があった。しかし、どちらもそれぞれの専攻に必要な古典語を習得することが、実際に文学作品を読むような上級クラスを履修するための必要要件であった²⁷⁾。また歴史学科のクラスは、例えば現存する1946-47年度のHistory10-bシラバスによれば、5世紀までの古代ローマの政治史・法制史を、白地図作業などを交えながら追っていくようなものであった。おそらく、このような歴史学のクラスでは、ILSのシラバス案が準備したような問い、特に学生が生きる同時代の問題とひきつけて考えさせるような問いは、たとえ意識の片隅に上っていたとしても授業内で掘り下げることには非学問的だと考えられていたかもしれない²⁸⁾。

ILSのクラスにおけるディスカッションには大学院生のティーチング・アシスタントがついていたが、授業やディスカッションを進める上で重要となってくるのは、それをリードする教師たちの存在であっただろう。特に「ギリシャ・ローマ文化」のシラバス案を作り、教えたアガードとマッケンドリックはどのような人物だったのか。1935年以来ウィスコンシン大学の古典学科の学科長を務めていたウォルター・アガード (Walter R. Agard, 1894-1978) は、ILS開設までに、古典をジェネラル・エデュケーションの一部として教えることに関して十分な経験があったと考えられる。なぜなら、アマースト・カレッジ出身のアガードは、彼のアマーストでの教師であったミールジョンが始めた実験カレッジで教えるため、つまり、まさに古典をジェネラル・エデュケーションの枠の中で教えるために、1927年マディソンに招聘された人物だからである。そして、実験カレッジ閉鎖後もウィスコンシンにとどまり、ギリシャ語とギリシャ史を教えていた²⁹⁾。

一方、ポール・マッケンドリック（Paul L. MacKendrick, 1912-1998）は、古代ローマ史が専門であった。ハーヴァードの卒業生であり第二次世界大戦中は海軍の諜報機関に従事していた彼は、戦後1946年に古典学科の教師としてマディソンにやってきた。マッケンドリックは、アガードに比べ、より研究活動に専念し多くの業績を残している。例えば、彼が後年ローマやその他の地中海沿岸の都市で行った研究は、遺跡発掘と考古学的調査による知見を古典の解釈に生かした「石は語る」シリーズとして知られることになる³⁰⁾。

とはいえ、マッケンドリックも人文学的教育の生涯にわたる影響を信じていたようである。ウィスコンシン大学のアーカイヴによるオーラル・ヒストリー・プロジェクトのためのインタビューの中で、彼はアガードがかつて言っていたという言葉——「誰もが無条件に学位を獲得できるべきではない。学生たちに学士号を与え、10年後に戻ってきてもらい、彼らに何が起こったのか見よう」——に賛同を示している³¹⁾。つまり、大学に在籍した4年間で本当に意味ある何かを学んだのかどうか、10年後に見てみて確かめようということである。しかし、インタビューの別の個所では、「人文学は、どう生きるかということについては教えてくれないとお考えですか?」という問いに、「それは、あなた次第ですね」と答え、ギリシャ・ローマの哲学者たちの道德論が生きる上で役立つかもしれないということを行っている³²⁾。もちろん、マッケンドリックが、こうした古代の道德論の実生活における応用といった表面的なことだけが人文学を人生に生かすことの全てであると考えていたわけではないだろう。むしろ、彼がここで表明しているのは、学生たちはカリキュラムで計画された通りに古典を読むわけではなく、また学ぶわけでもないという、教育上の根本的な問題である。シラバス案は、どのような古典がどのように読まれるべきであるか、そしてそこから学生たちが何を学ぶべきであるかということについての教師たちの期待を反映している。しかし、どれだけ綿密にカリキュラムが組み立てられ準備されたとしても、ひとりひとりの学生がそこで何をどう読み、何を学んだのかということは、究極的には予測不可能であり、また外部から簡単に判断できるものでもないのである。

3. 古典の読者たち：初期ILSプログラムに参加した学生たちは誰であったか

さてここまでカリキュラムやシラバスから、ILSの教師たちが古典の読書について何を期待してきたかを見てきた。しかし、そこから学生が実際に何を読み取り、学んだかということは自明ではない。近年、雑誌の読者投稿欄や編集者への手紙、日記、自伝、図書館の貸し出し記録などを利用して、そこから歴史上実在した読者たちの姿、また彼らが実際に何を読み取ったのかという反応を描き出そうとする研究もさかんである³³⁾。しかし、史料の制約から読者の反応にたどりつくのは必ずしも容易ではない。そこで第一段階として重要になってくるのは、おそらく誰が読者であったかということであろう。したがって、この節では、ILSに所属した学生はどのような人たちであったのかを、主にILS専属のカウンセラーが残した報告書から探っていく。紙幅の関係から、ここではILS創設後の初期、1948年および1949年に入学した学生についてのみを扱うことにする³⁴⁾。

ILSにはその開設時から、パートタイム勤務の専属カウンセラーがおり、ILSの学生が学業面での、また個人的な問題を自由に相談できる体制があった。それ以外にカウンセラーは、各学生について、入試の記録、ILS内の作文のクラスで各自が書いた自伝的エッセイ、教員・職員からの報告、成績、卒業後の計画などを含む記録を作成していたようである。そして、もし何らかの問題が見られる場合には、学生を呼び出し適宜面接するなどしていた。またカウンセラーはしばしば小規模のアンケート調査など

を実施し、学生についての情報を集め分析していた³⁵⁾。

ILS開設時の懸念事項を反映して、カウンセラーが初期に取り組んだ仕事は主に3つに分類できるだろう。ILSの学生たちの1) 出身, 2) 学力適性, 3) 就職希望, である。もちろん、これらの情報はプログラムの評価・改善のために集められ分析されたものである。しかし、ILSの学生たちがどのような特徴を持つ集団だったのかを明らかにするためにも有益であると考えられる。

まず第一に、学生の出身地に関しては、大部分の学生が大学のあるウィスコンシン州出身であることが明らかになっている。1948年には、ILSに登録した204名の1年生のうち170人が、そして1949年には224名のうち169名がウィスコンシン州出身であった。またウィスコンシン州以外では、イリノイ州、ニューヨーク州、オハイオ州出身の学生たちがILSに最も多く在籍しており、この傾向はILSの開設以来5年間は続いた。また、このような出身地の分布に関する配慮、すなわち、ILSの学生をそれ以外の学生グループと著しく異なる集団にしないことは、まさにILSの開設にあたり留意された点でもあった。カウンセラーは、ミークルジョンの実験カレッジの学生たちの多くが東海岸の都市部出身であったことを考慮し、ILSの学生たちの出身地の町の人口サイズも分析している。カウンセラーによる報告書によれば、おおよそ半数以上の学生（1948年には155名、1949年には144名）が人口1万人以上の都市出身であった。そのうち、例えば1948年には、57名がウィスコンシンの州都であり大学のあるマディソン、30名がミルウォーキー（ウィスコンシン州）出身であり、90%以上の学生が公立高校の出身であった。したがって、ILS初期の学生たちの特徴は、ウィスコンシンの都市部出身者であるといえる。また、使用できる適切な寮がなかったために男女共学を諦めた実験カレッジとは異なり、学生の男女比も半々に近かった。したがって、学生が不自然に偏ったエリート主義的な構成のグループになることを避けたという意味でILSは成功したといえるだろう³⁶⁾。

第二に、ILSの学生たちの学業面における特徴はどのようなものであったか。カウンセラーは入試での適性試験の結果などをもとに、分析し報告にまとめている。まず、当時の入試に使われていた3つの指標（出身高校のランク、Herman-Nelson College Percentile Score, the American Council on Educational Psychological Examination (ACE))において、1948年と1949年入学のILSの学生はその年の1年生全体よりも少し高いスコアを残しているとしている。特にACEの結果はILSの学生の特徴をよく表していた。「数量的パートではILSの学生のパーセンタイル値の平均は48.82で大学平均の50をわずかに下回るが、言語的パートでは60と大学平均の50を大きく上回った」のである。カウンセラーは、この点に関して、ILSの学生は、大学全体からランダムに選ばれた1年生と比べた場合、言語活動の比重の多いILSのプログラムを続けるのにより適性があると一般化することができると結論付けている³⁷⁾。

1949年入学の学生についての報告書は、読解力に関する指標（The Cooperative Reading Test and the Cooperative General Culture Test）のさらに細かい結果分析をまとめている。カウンセラーは、ILSのグループが、大学平均の50に対して61.45というかなり高いパーセンタイル値を示していることをうけて、彼らがより高い読解力を持ち合わせていると分析している。特に、ILSの学生は、読む速さ、ついで理解力、そして語彙力において高いスコアを残していた³⁸⁾。途中でILSを去った学生の多くが十分によい成績をとれていなかったことを考えると、ILSのカリキュラムに適性のある学生がILSに引き付けられ、またそうした学生がプログラムに残っていくこととなったといえるだろう³⁹⁾。

第三に、ILSプログラムが留意していた学生の将来の職業選択については、どのような特徴があったのか。学生に対するアンケートによれば、ほとんどの学生が将来就きたい職業を大まかには考えていた

ようである。しかし、カウンセラーはそこに「いくつかの分野に対する異常な関心」を見て取っていた。半数以上の学生たちが言及したそれらの分野は教育、ソーシャル・ワーク、心理学、産業界での人材に関わる仕事、言語矯正、レクリエーションのリーダー、および官僚である。この傾向は、「部分的には、ILSのプログラムが、授業で扱う題材についての個人的また社会的意味に関する認識をしばしば取り上げることに對する、学生たちの異常なまでの反応」の結果であると結論付けている⁴⁰⁾。

こうした学生の職業に関する希望がどの程度通常とは異なるものであったのか、比較するデータがないためにはっきりとは分からない。しかしながら、この点を補完し、またILSが学生たちに与えた長期的な影響を図り知る手掛かりとして1964年に編集された卒業生名簿がある⁴¹⁾。これはILSの卒業生たちに郵便でそれぞれの名前、入学年度、住所、現在の職業などについて質問し、返送されてきた情報をもとに作成されたものである。したがって卒業生の全てを網羅するわけではないが、1948年と49年の入学者に関しては合計およそ100名の卒業生の消息を掲載している。それによれば、名簿に掲載の1948年および49年入学の学生の中では、男性では弁護士、女性では主婦となった者が最も多いものの、それ以外では実際に教育、ソーシャル・ワーク、またカウンセリングや言語セラピストなどの近接した分野で職を得た者も数多くいたことがわかる。また、興味深いのは1964年まででILSの卒業生同士で少なくとも24組の者が結婚していたことである⁴²⁾。

ILSの中の「ギリシャ・ローマ文化」という一つの科目、そして古典を読んだことがこうした卒業生たちの人生にどのような影響を与えたかということは、もちろんどのような学生がILSにいたのかということや、この卒業生名簿にある情報のみから十分に読み取れるものではない。しかしながら、ILSがプログラム全体を通して、学生たちの間に、時には彼らのうちの何名かを結婚に導くことさえあるような共通の経験を築き、また郵送での質問にわざわざ返送するのをいとわないほどに十分なILSへの愛着を育てた、ということは言えるだろう。また、実験カレッジとは異なり、ごく平均的なウイスコンシン大学の学生たちがILSへ参加できるようにしたことにより、州立大学におけるジェネラル・エデュケーションのプログラムとして、古典の学習につきまとう特権的な意味合いを排除するというねらいも1948年と49年入学の学生の出身を見る限りある程度現実のものとなった。ILSプログラムは、そうした学生たちに、「共通の核」として、このプログラムの外ではおそらく得られなかったような知的経験を与えようとする試みであった。そして、その共通の知的経験の中には、ギリシャ・ローマの古典を歴史学とも古典学とも違う方法で学ぶという経験も含まれていた。すなわち、古代史の専門的訓練の基礎を築くためではなく、また古代語の習得でもなく、ある文明を学問横断的に全体として見ることで人間の営みの諸側面が互いに関係しあっていることを学び、またそこから得られた知見をもとに自分たちの問題を考えるという経験である。「ギリシャ・ローマ文化」という科目のねらい、またILSプログラム全体としてのねらいはこうした点にあったといえる。

おわりに

これまでみてきたようにILSの中でギリシャ・ローマの古典は、新しいジェネラル・エデュケーションのカリキュラムとしてILSプログラム全体の目的に合致するよう読まれ学ばれることが意図されてきた。第一には、古代ギリシャ・ローマについて学ぶことは、リベラル・エデュケーションを再定義する中で、特に20世紀前半のジェネラル・エデュケーションの展開の中で、「共通の核」を形成する重要な要素のひとつとなっていた。第二に、ジェネラル・エデュケーションを担うILSプログラムにおける古

典の学習は、古代文明に関する歴史的・考古学的学習あるいは古典語の習得よりも、現代アメリカにまでつながる西洋文明の歴史的継続性、またある文明における人間の活動の諸側面の相互関係を学ぶことに重きが置かれていた。そしてプログラム全体を通して、学生自身の生活や現代アメリカの問題をもそうした歴史的文脈の中に位置づけ、ひとつの有機的連関の中で考えるよう期待され、この点において一貫性のある学習経験が与えられると考えられた。第三に、特に実験カレッジの教訓をふまえて、ジェネラル・エデュケーションのプログラムとして、人文学的なリベラル・エデュケーションにつきまとうエリート主義的な意味合いを払拭することが意図された。プログラムへの登録は新入生全員に開かれ、また学生の特性や彼らの成績、要望、悩みなどに責任を持って対応する態勢が整えられたのである。このような環境の中で、ギリシャ・ローマの古典を読むことが一体どのような影響をどのくらい学生ひとりひとりに与えたのかははっきりとは分からない。少なくとも、本稿では、ILS創設の意図、「ギリシャ・ローマ文明」のシラバス案と、ILSに所属した学生集団の特徴の分析から、ILSプログラムが、より一般的なウィスコンシン大学の学生たちにギリシャ・ローマの古典を含む西洋の知的伝統を「共通の核」として学ぶ、ジェネラル・エデュケーションの機会を与えようとしていたことが明らかになった。

ILSプログラムは、本稿で扱った1949年以降もアメリカ社会と時代の変化とともにその性質および評価を変えながら現在まで続いている。一例を挙げれば、1950年代初頭にはフォード財団の支援による、優等高校生（「フォード・スカラー」）のための飛び級制度にウィスコンシン大学も協力し、東部出身で社会的経済的に恵まれた出自の優秀な学生たちがILSプログラムに入学したために、ILS創設当初の州民中心の構成が崩れるとともに、ILSは、競争の激しい、エリート主義的なプログラムであるという評判が現れるようになった⁴³⁾。また1960年代には、まさにボイヤーらが指摘したように、ILSのいわば伝統的な「共通の核」を持つカリキュラムの「古さ」と、より専門的な学習の要請を背景に、ILSに登録する学生の割合は減少していくのである⁴⁴⁾。本稿では現在に至るまでのILSの趨勢とその背後にある要因の全てを論ずることはできなかったが、ILSをはじめとするジェネラル・エデュケーションのプログラムは、このように常にさまざまな要因によって影響を受けざるを得ないということが指摘できるだろう。

ある社会の若者たちが共通に学ぶべきことは何かという問題は、アメリカにおいても日本においても現在に至るまで議論され続けている重要な問題である。高等教育の文脈では、アメリカにおいては特に1980年代以降、多文化主義とそれを背景にはびこる文化的相対主義をめぐって活発な議論が行われている⁴⁵⁾。日本においても、「教養教育」という言葉を使って、専門や将来の職業に関わらず学び身につけるべきものは何なのかということということが議論され、そしてそれをもたらす教育の在り方が模索されている⁴⁶⁾。学生が共通に学ぶべきことは何なのか、またそれを定義し、それにみあったカリキュラムや教育の方法はどういったものであるかということを考える際、古典と西洋の知的伝統をエリート主義的な意味合いを排除しつつジェネラル・エデュケーションの枠組の中で維持し意味づけようとしたILSの取り組みは、興味深い前例となるだろう。

注

- 1) *General Announcement of Courses 1948-1950, Bulletin of the University of Wisconsin*, General Series No. 2898 (Madison, WI, September, 1949), 155, University of Wisconsin Archives (UWA).
- 2) Caroline Winterer, *Culture of Classicism: Ancient Greece and Rome in American Intellectual Life 1780-1910* (Baltimore; Johns Hopkins University Press, 2002), 1.

- 3) Winterer. 特にIntroductionとEpilogueを参照.
- 4) Elizabeth Long, "Textual Interpretation as Collective Action," in *The Ethnography of Reading*, ed. Jonathan Boyarin (Berkeley: University of California Press, 1993), 191.
- 5) Long, 191-192.
- 6) Winterer, 179-183; David O. Levine, *The American College and the Culture of Aspiration 1915-1940* (Ithaca: Cornell University Press, 1986), 68-112.
- 7) Ernest Boyer and Arthur Levine, *A Quest for Common Learning: The Aims of General Education* (Princeton: Princeton University Press, 1981), 5-16.
- 8) Levine, 78.
- 9) Levine, 96-99.
- 10) Winterer, 4, 180-181.
- 11) Boyer and Levine, 10.
- 12) Alexander Meiklejohn, *The Experimental College* (New York: Arno Press, 1971), 68-75.
- 13) Adam R. Nelson, *Education and Democracy: the Meaning of Alexander Meiklejohn 1872-1964* (Madison: University of Wisconsin Press, 2001), 165-196.
- 14) Samuel E. Kellams, "Integrated Liberal Studies: An Analysis of a General Education Program at the University of Wisconsin" (Ph.D. diss., University of Wisconsin, 1971), 55-61.
- 15) Boyer and Levine, 1-3, 14.
- 16) Harvard Committee, *General Education in a Free Society: Report of the Harvard Committee* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1946).
- 17) Boyer and Levine, 15-16.
- 18) *ILS Pioneer* (Oct. 30, 1948), 1, 7/18/00, Integrated Liberal Studies Record, UWA.
- 19) Committee B, The University of Wisconsin College of Letters and Science, "A Program of Integrated Liberal Studies: The Report of Curriculum Committee B" (Madison, 1947), 1, box 1, 7/18/2, Integrated Liberal Studies Record, UWA.
- 20) Committee B, 14.
- 21) The Department of Integrated Liberal Studies, *Announcement of the Program of Integrated Liberal Studies, Bulletin of The University of Wisconsin*, General Series No. 2834 (Madison, WI, April, 1949), 6, 11-16, box 1, 7/18/2, Integrated Liberal Studies Record, UWA.
- 22) The Department of Integrated Liberal Studies, 11-12.
- 23) Lois J. Stacker, "A Comparison of Characteristic Traits and Attainments of Freshmen in Integrated Liberal Studies and Other University Programs" (Ph.D. diss., University of Wisconsin Madison, 1952), 5; Committee B, 17-18.
- 24) Walter Agard and Paul MacKendrick, "Integrated Liberal Studies 11, Humanities, First Semester: Greek and Roman Culture," 1, box 1, "Courses & Course Proposals" folder, 7/18/2, Integrated Liberal Studies Record, UWA.
- 25) Charles. T. Murphy, Kevin Guinagh, and Whitney J. Oates, preface to *Greek and Roman Classics in Translation* (New York: Longmans, Green and Co., 1947), v-vi; Agard and MacKendrick, 1; マッケンドリックは1952年にはホウ (Herbert M. Howe) とともに、ILSのために2巻からなる *Classics in Translation* (Madison: University of Wisconsin Press, 1952) を出版し教科書として使用した。
- 26) Agard and MacKendrick, 1-12.
- 27) *General Announcement of Courses 1948-1950*, 103-106.
- 28) "Syllabus Prepared for the Use of History 10-b" (1946?), MacKendrick Papers, 1998/068, UWA; *General Announcement of Courses 1948-1950*, 146-149.
- 29) Walter Agard, interview by Stephen Lowe, 1972, transcript, University of Wisconsin-Madison Archives Oral History Project, UWA.
- 30) 例えば, *The Mute Stones Speak: the Story of Archaeology in Italy* (New York: Norton, 1960) and *The North*

African Stones Speak (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1980) などである。

- 31) Paul MacKendrick, interview by Laura Lord Smail, 1979, transcript, University of Wisconsin-Madison Archives Oral History Project, UWA.
- 32) MacKendrick.
- 33) こうした研究のごく一例を挙げれば, Joaane E. Passet, "Freethought Children's Literature and the Construction of Religious Identity in Late-Nineteenth-Century America," *Book History* 8 (2005): 107-129; Barbara Sichterman, "Sense and Sensibility: A Case Study of Women's Reading in Late-Victorian America" in *Reading in America: Literature and Social History*, ed. Cathy N. Davidson (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1989) 201-225; Ronald J. Zboray and Mary S. Zboray, "Reading and Everyday Life in Antebellum Boston: The Diary of Daniel F. and Mary D. Child," *Libraries and Culture* 32 (1997): 285-323; Better Than Billiards: Reading and the Public Library in Osage, Iowa, 1890-1895," in *Print Culture in a Diverse America*, ed. James P. Danky and Wayne A. Wiegand (Champaign, Ill.: University of Illinois Press, 1997) などがある。
- 34) 1948年度のカウンセラーは, Henry P. Lampman, 1949年度はLouis J. Stackerである。
- 35) Henry P. Lampman, "Counseling in the Program of Integrated Liberal Studies, September 1948-April 1949" (April, 1949), "Counseling Activity" folder, box 1, 7/18/2, Integrated Liberal Studies Record, UWA.
- 36) Louise J. Stacker, untitled report (November 14, 1949), 1, "Counseling Activity" folder, box 1, 7/18/2, Integrated Liberal Studies Record, UWA; Untitled table, "Student Record" folder, box 2, 7/18/2, Integrated Liberal Studies Record UWA.
- 37) Lampman, Appendices 4.
- 38) Stacker, untitled report, 4.
- 39) Lampman, Appendices 7
- 40) Lampman, Appendices 6.
- 41) *ILS Class Directory 1948-1964*, box 1, box 1, 7/18/2, Integrated Liberal Studies Record, UWA.
- 42) *ILS Class Directory*.
- 43) Kellams, 219-220.
- 44) Kellams, 18, 298-301.
- 45) 例えば Alan Bloom, *The Closing of the American Mind: How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students* (New York: Simon & Schuster, 1987); Lawrence W. Levine, *The Opening of the American Mind: Canons, Culture, and History* (Boston: Bacon Press, 1996).
- 46) 中央教育審議会, "新しい時代における教養教育の在り方について (答申)," 2002, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203.htm.